信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

４年１組

リンゴのいのちを　感じるわたし

～リンゴと過ごした時間をふりかえって～

リンゴが教えてくれたこと　リンゴが語ってくれたこと

リンゴ畑を歩く。春のリンゴ、夏のリンゴ、秋のリンゴ、冬のリンゴに出会う。一つ一つのリンゴの成長に驚きとよろこびを感じた時間。そして、「今日のリンゴ」から不思議や発見を教えてもらう。いつのまにか花が開き、知らぬ間に実をつけて、雨の日も、風の日も、木から落ちずにぶらさがっている。私たちはそんな「今日のリンゴ」に会いたくて、リンゴ畑を歩きました。見れば見るほど、触れれば触れるほど、リンゴの声が聞こえてきました。

（令和３年度「学事報告」より）

私たちは、総合学習でリンゴ農家の方と「秋映」「ふじ」の２本のリンゴの木を育ててきました。

１年間のリンゴとの時間をＡさんは、次のように振り返りました。

…リンゴを育てるのは、簡単なことではないと分かりました。リンゴの木を貸してくれた農家さんに会っていろいろと教えてもらい分かりました。リンゴを育てるということは、ただそれをやると言うより、一つ一つ愛を込めて、一つ一つ考えてやるのだと感じました。三年生の時もそうだったけど、ヤギのことはよく知らなかったのに今ではヤギが大好きになりました。リンゴも、前はただ、美味しいなと思っていただけでした。でも今は、リンゴを見るたびに、「あっ、リンゴだ！」と、特別な思いを感じるのです。…

Ａさんにとってりんごとの大切な出会いがあったのだと思います。それは、日々、成長を続ける「リンゴ」の姿です。大きさ、色、形など毎回、その姿の変化に驚かされました。もう一つの出会いは「リンゴ農家のおじいちゃん、おばあちゃん」でした。「よく来たね」とリンゴ畑で作業をしながら子どもたちのことを待ってくれていたお二人でした。Ａさんは、よく農家さんに質問をしていました。摘花のこと、中心花のこと、リンゴの品種や、作業の大変さなど、リンゴ畑に行かないと聞くことができない「農家さんのリンゴ話」をたくさん聞いていました。リンゴの成長と農家さんの言葉が、Ａさんにとって「一つ一つの愛」、特別な思いとして感じられていったのだと思います。また、Ａさんと同じリンゴ畑に通い続けたＢさんも、「…リンゴの学習を終えました。一番心に残ったのは、農家さんの笑顔でした。」とこれまでの学習を振り返っていました。

農家さんの笑顔。おそらく子どもたち全員が思い浮かべることができるのではないでしょうか。春、夏、秋、冬とリンゴの観察を続ける中、農家さんが作業をしている時間と観察時間が、重なることがよくありました。その度に、リンゴの「今」を語ってくださり、「楽しみだねえ」「もうちょっとで収穫だよぉ」と笑顔を見せてくれました。観察を終え、学校へ向かう子どもたちの後ろ姿に、「みんな、ありがとね。リンゴが『またおいで～』って言ってるよ」と私たちを見送ってくださいました。子どもたちは農家のおじいちゃんのその一言に、振り返って手を振っていました。

子どもたちの口癖のような一言がありました。それは「先生、『今日のリンゴ』行きたい」でした。

「今日のリンゴはどうなっているのかな」と、自分たちと同じように生きているリンゴのことが気になっていったのだと思います。そのような「今日のリンゴ」が見せてくれる姿を C さんは次のように思い返していました。

春、リンゴはまだ5センチもないくらいの小さな緑の実でした。花は咲いていなくて初めて見たぼくは、「本当にこんなにも小さな小さな緑の実が、大きな大きな赤いリンゴになるのか」と、不安に思いました。だけど、毎週のように観察していくと、すごい早さで大きく成長していくのがわかりました。「このままいけば、きっと大きなリンゴになるだろう」と、不安は確信に変わりました。

ある日の観察の時でした。C さんは、リンゴ畑から教室に戻ってくると、「リンゴって不思議な植物だと思う」とクラスの友だちと「リンゴの不思議」について話し合いました。リンゴは何も言わないけれど、見れば見るほど、触れば触るほど、リンゴのことばを聞かせてくれるのかもしれません。植物であるリンゴ。その魅力を C さんも子どもたちも感じた１年間だったのでしょう。

そして、りんごのことを話し合ってきた中で、最も大きい話し合いだった葉摘みのこと。その話し合いは一週間続きました。子どもたち一人一人が、自分とりんごのかかわりを見つめ直した時間でした。

「おいしいりんごじゃなきゃいけないのかなあ。リンゴが自分で生きるスピードがあるんだから…」と葉を摘むことへの違和感をクラスの仲間に話す D さん。「リンゴを大切に育てる」とは、リンゴがリンゴとして生きる、自由な育ちを D さんは願っていたのかもしれません。９月１日の話し合いで、友だちの「…リンゴに自由にやらせてあげてもいいんじゃないか」という言葉に続き、「リンゴには手や足もない。赤くなりたくても甘くなりたくてもできない。無理矢理じゃなくて、ただ手伝うだけ。サクラちゃんのときもそうだったけれど」と昨年度のことを思い出しながら仲間に「葉摘み」への気持ちを伝えていました。この発言から、子どもたちは、葉摘みをするのかしないのかという二者択一の問題から「リンゴにとってどのような葉摘みがいいのか」という意識へと変わっていきました。そして、「葉も大切な命だから、なるべくそのままにして、本当に必要な分の葉だけ摘む」、「リンゴが光をもらえる分だけ葉を摘む」など、リンゴと私たちにとって納得のいく葉摘みについて思いを伝え合っていきました。「もう、みんなの気持ちは一緒なんじゃない。リンゴを大切にする気持ちは同じ」と E さんが話し合いの終わりを告げると、子どもたちは教室を飛び出してリンゴ畑に走っていきました。そして、D さんも、そのリンゴにとって光が当たるように葉を選んで摘んでいました。

リンゴの収穫を終えた１２月。D さんは、リンゴとの時間を次のように振り返っていました。

私の心は、リンゴが育っていくように少しずつ成長してきたと感じます。リンゴの実を作るのはもちろん手作業です。大変でもどんなに辛くてもリンゴは私たちの頑張りを知っているから、私の想像以上に綺麗で美しく「凛」としていました。やっぱり一つ一つ丁寧に作られたリンゴは「リンゴ」というものとして張り切っているように見えました。リンゴは何と言われても、何があっても人間とはちがって動じません。人間のような言葉や意志はないからです。その代わり、リンゴは見た目や味があります。私は、リンゴの色が薄くても甘くなくてもいいなと思います。それは、その一つのリンゴの「個性」だと思うからです。それは人の心も同じだと思います。人は見た目ではなく「心」ということをリンゴから学べました。

子どもたち一人ひとりに、このようなリンゴとの時間がありました。これまで当たり前に見えていたもの、特に気にすることのなかったことが、特別に感じ直されるということ。リンゴが教えてくれたこと、リンゴが語ってくれたこと、その一つ一つに子どもたちの心の目と耳の成長を感じるのです。リンゴ、ありがとう。